

比恵 8 9

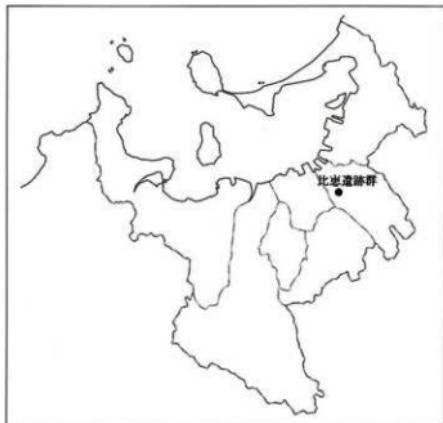
— 第152次調査報告 —

2021

福岡市教育委員会

比恵89

— 第152次調査報告 —



遺跡番号 HIE-152
調査番号 1818

2021

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財について事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は共同住宅建設工事に伴う比恵遺跡群第152次調査について報告するものです。この調査では、弥生時代から古代にかけての集落遺跡を検出し、貴重な成果をあげることができました。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究の資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、土地所有者様をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和3年3月25日

福岡市教育委員会
教育長 星子 明夫

例　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が共同住宅建設工事に伴い、福岡市博多区博多駅南4丁目220の一部で平成30年8月27日から同年10月11日にかけて発掘調査を実施した、比恵遺跡群第152次調査の報告書である。
2. 発掘調査および整理報告書作成は、民間受託事業および国庫補助事業として実施した。
3. 遺構の実測と写真撮影は上角智希が行った。
4. 遺物の実測と写真撮影は上角が行った。
5. 製図は上角が行った。
6. 本書で用いる方位は磁北である。
7. 本書に掲載した座標は世界測地系を用いた。
8. 座標・標高は、都市再生街区基本調査成果の補助点1A247(H=5.875m)、2A667から引照した。
9. 本書に使用した遺構略号は以下の通りである。
SB 挖立柱建物、SC 壓穴住居、SK 土坑、SU 貯蔵穴、SP 柱穴・ピット
10. 本書に記載する記録・遺物等は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
11. 本書の執筆・編集は上角が行った。

遺跡名	比恵遺跡群	調査次数	152次	調査略号	HIE-152
調査番号	1818	分布地図図幅名	37 東光寺	遺跡登録番号	0127
申請面積	261.42 m ²	調査対象面積	116 m ²	調査面積	116 m ²
調査期間	平成30(2018)年8月27日～10月11日			事前審査番号	30-2-71
調査地	福岡市博多区博多駅南4丁目220の一部				

本文目次

第1章 はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
第2章 遺跡の立地と環境	2
第3章 調査の記録	6
1. 調査の概要	6
2. 遺構と遺物	7
1) 竪穴住居跡	7
2) 貯蔵穴	9
3) 掘立柱建物	13
4) 土坑	15
5) 柱穴・ピット	16
第4章 まとめ	16

挿図目次

第1図 比恵遺跡群の旧地形と第152次調査の位置 (1/10,000)	3
第2図 第152次調査区周辺の調査歴と旧地形 (1/2,500)	4
第3図 第152次調査地点位置図 (1/500)	5
第4図 遺構配置図 (1/100)	6
第5図 SC08・09・18 および出土遺物実測図 (1/60、1/3、1/4、1/1)	7
第6図 SC16 および出土遺物実測図 (1/60、1/3)	8
第7図 SU01・11・14・19 実測図 (1/40)	10
第8図 SU01・11 出土遺物実測図 (1/3)	11
第9図 SUI9 出土遺物実測図 (1/4)	12
第10図 SB20・21 および出土遺物実測図 (1/80、1/3)	13
第11図 SK05・06 および出土遺物実測図 (1/40、1/3)	14
第12図 SK17・SP118 および出土遺物実測図 (1/40、1/3)	15

写真目次

写真1	1区全景（東から）	17
写真2	2区全景（北東から）	17
写真3	SU01断面（東から）	18
写真4	SU11断面（北東から）	18
写真5	SU14断面（南東から）	18
写真6	SU19断面（北から）	18
写真7	SC16床面検出状況（南東から）	18
写真8	SK06（南から）	18
写真9	出土遺物	19

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市博多区博多駅南4丁目220の一部における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成30年4月25日付で受理した（事前審査番号30-2-71）。

これを受け埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である比恵遺跡群に含まれていることから、平成30年6月12日に試掘調査を行った。試掘の結果、現地表下50cmで橙色の鳥栖ロームを検出し、弥生時代から古墳時代にかけての遺構・遺物が検出された。

遺構の保全等に関して申請者と協議を行ったが、工事による埋蔵文化財への影響が回避できないため、工事が行われる範囲について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、平成30年8月24日付で個人を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年8月27日から発掘調査を、令和元～2年度に資料整理および報告書作成を行うこととなった。なお、発掘調査および資料整理・報告書作成とともに一部を国庫補助事業として行った。

2. 調査の組織

調査委託：個人

調査主体：福岡市教育委員会

（発掘調査：平成30年度・資料整理：令和元～2年度）

調査総括：文化財活用部埋蔵文化財課長

大庭康時（30年度）

菅波正人（元～2年度）

同課調査第1係長

吉武学（30～2年度）

庶務：文化財活用課管理調整係

松原加奈枝（30～2年度）

事前審査：埋蔵文化財課事前審査係長

本田浩二郎（30～2年度）

同課事前審査係主任文化財主事

田上勇一郎（30～2年度）

同課事前審査係文化財主事

中尾祐太（30年度）

山本晃平（元～2年度）

調査担当：埋蔵文化財課調査第1係主任文化財主事

上角智希（30～2年度）

第2章 遺跡の立地と環境

福岡平野の中央部、博多湾に向かって北西に流れる御笠川と那珂川に挟まれた洪積台地上には、河口側から順に、博多遺跡群、比恵遺跡群、那珂遺跡群、板付遺跡などの重要遺跡が立地している。この台地の基盤層は花崗岩疊層であり、その上面に阿蘇山火碎流堆積物起源の八女粘土層・鳥栖ローム層・新期ローム層が堆積している。

比恵遺跡群と那珂遺跡群とは、浅い谷を介しながらも連続した同一丘陵上にあり一連の遺跡群を構成している。その範囲は、南北 2.4 km、東西 0.8 km および、現地表面の標高は約 4.5 ~ 9m を測る。

比恵遺跡群では、縄文時代晩期末から中世にかけて各時期の遺構・遺物が大量に出土している。ことに、弥生時代中期の青銅器生産関連遺物や舶載金属器の出土や、6 世紀後半の「那津官家」との関連が指摘される倉庫群と柵列の検出が著名である。

比恵遺跡群周辺の地形をさらに細かく見ると、那珂川・御笠川から派生する中小河川によって開析をうけた結果、もともとはひと続きであった洪積台地がいくつかの島状台地に分離され、その丘陵と丘陵との間に狭い谷部（河川流路）が入り込んでいる（第1図）。

比恵遺跡群は地形的に大きく 3 つのエリアに区分される。①中央台地（最も面積が広い）と、②北台地（中央台地の北側に幅 50m 程度の東西方向の河川流路を挟んで立地する）、③西台地（中央台地の西側に幅 100m 以上の南北方向の谷（河川流路）を挟んで立地する）である。また、比恵遺跡群の東側にも幅 50m 程度の谷を挟んで山王遺跡が立地しており、こちらも同時期の一連の遺跡と理解してよい。

本書で報告する第 152 次調査地点は、比恵遺跡群の北台地に立地している（第2図）。北台地は、およそ南北 300m、東西 200m の広さで、その北側は博多遺跡群が立地する砂丘の後背湿地に面しており、大きく 2 列の尾根が伸びている。南側は前述のように河川流路によって中央台地と切り離されている。この流路は壁面の傾斜から人為的な掘削が指摘されており（第 31 次調査）、運河のような性格であったかもしれない。

北台地においては多くの発掘調査が行われている。本地点の東側に隣接する第 30・31・37 次調査区では、弥生時代前期中頃～末の貯蔵穴 40 基ほどがまとまって検出されている（第3図）。本地点の南側隣地における第 94 次調査においても貯蔵穴の続きが検出されている。

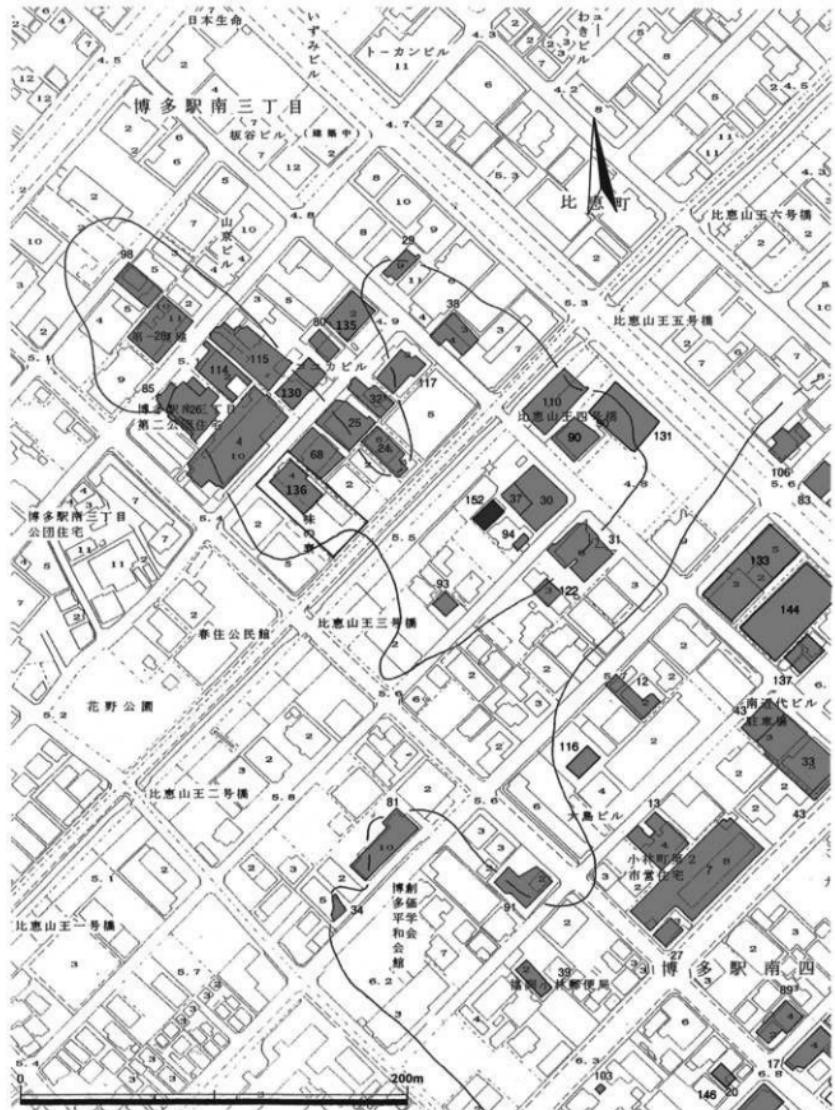
第 31 次調査区では中央台地との間を東西に走る河川流路の北岸が確認された。そこから北に 30m ほど離れた第 90・110 次調査区では、同時期の堅穴住居跡群が確認されている。その東側の第 131 次調査区は北台地の縁辺部にあたり、東側で南北方向に走る河川流路が確認でき、そこに大規模な井堰が築造されていた。この河川流路が北台地と中央台地を切り離している河川流路（第 31・122 次調査）につながるものと推測される。

北台地の北半でも弥生時代前期の貯蔵穴・堅穴住居跡・土坑・水田が検出されたほか（第 98・28・26・85 次）、弥生時代中期の甕棺墓 12 基がまとまって出土した（第 4・28 次）。また、北側の 2 列の丘陵間の谷部の調査（第 24・25・32・80 次）では、遺物包含層から大量の弥生土器・石器・木器が出土している。

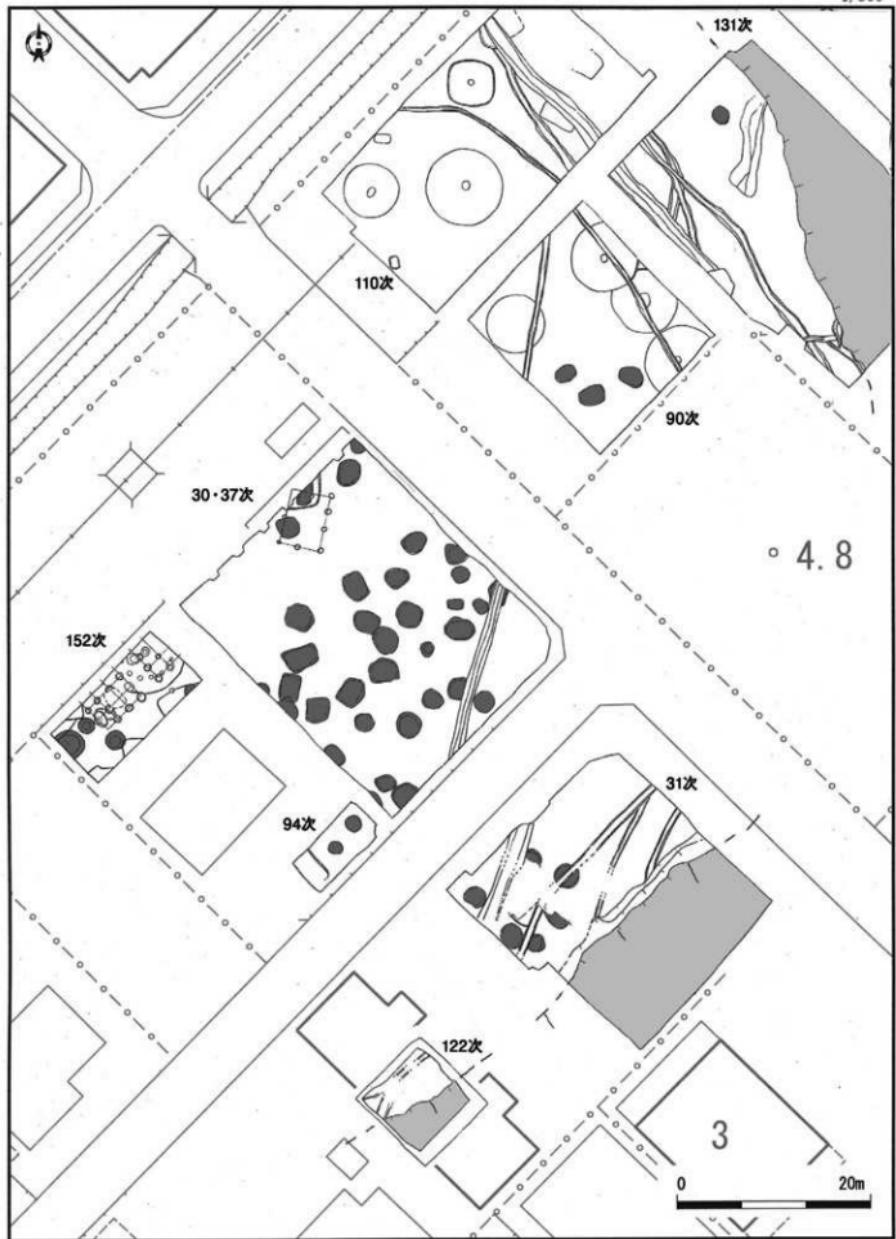
以上のように比恵遺跡群の北台地エリアでは、弥生時代前期中頃～中期の遺構・遺物が主体を占めている。弥生時代中期前半～中頃初頭にかけては北西側に墓域が形成され、南東部分が生活域として使用されていたようである。



第1図 比恵遺跡群の旧地形と第152次調査の位置(1/10,000)※『比恵66』第5図を改変



第2図 第152次調査区周辺の調査歴と旧地形(1/2,500) ※比恵76 Fig2を改変



第3図 第152次調査地点位置図(1/500)

第3章 調査の記録

1. 調査の概要

【調査区の設定】

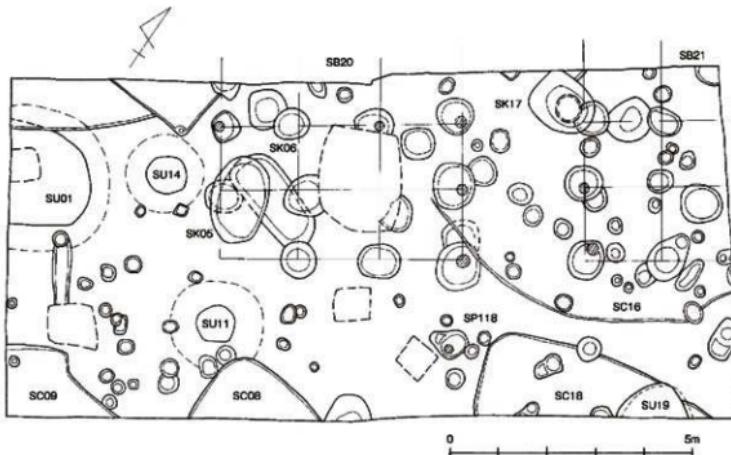
調査地の現況は宅地である。周辺の一帯は低層の戸建住宅を主体とした住宅地である。調査地南側の道路の標高が 5.9m、調査地の標高が 6.2m 程度である。敷地面積 261.42 m² のうち建築工事により遺跡が破壊される 116 m² が調査対象となり、調査区上端で 116 m²、下端で 102 m² を実際に調査した。排土を敷地内で処理する都合から、調査は西半の 1 区、東半の 2 区に分けて実施した。

【層序】

現地表 GL-40 cm まで褐色土の客土、-50 cm まで鳥栖ローム層の 2 次堆積層が堆積する。GL-50 cm (標高 5.7m) で鳥栖ローム層を検出し、これが遺構面となる。遺構面はほぼ水平に広がっている。

【検出遺構・遺物総量】

弥生時代前期から古墳時代にかけての遺構が密に分布していた。主な検出遺構は、弥生時代の竪穴住居跡 4 棟・貯蔵穴 4 基・土坑 3 基、古墳時代の竪穴住居跡 2 棟・掘立柱建物 1~2 棟・土坑 1 基、古代の土坑 1 基のほか、ピット多数である。ピットについて出土土器を観察した結果、直径 70 cm 以上の大きな柱穴は古墳時代、直径 50 cm 以下の小さな柱穴・ピットは弥生時代という傾向がみられた。出土遺物は全部でコンテナ 7 箱分が出土した。



第4図 遺構配置図(1/100)

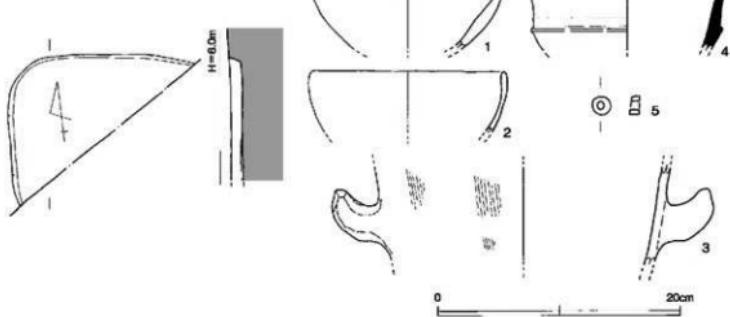
2. 遺構と遺物

1) 壁穴住居跡

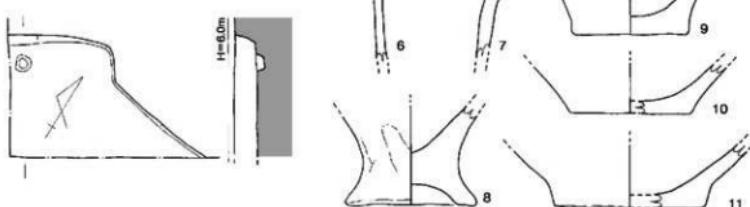
SC08 (第5図)

隅丸方形の壁穴住居跡の隅であろう。調査区内では長軸 2.3m、短軸 1.7mを検出し、深さ 20 cmを

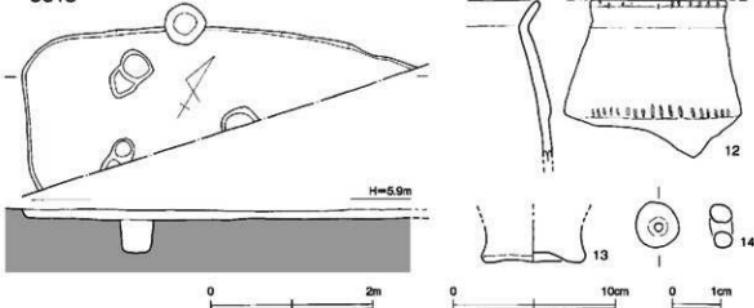
SC08



SC09



SC18



第5図 SC08-09-18(1/60)および出土遺物実測図(1/3, 1/4, 1/1) 5-14は1/1, 3は1/4, ほかは1/3

測る。埋土は黒褐色粘土とロームの混合土。古墳時代後期の土器が少量出土した。

第5図1・2は土師器の丸底坏である。1は口縁部で約1/3が残り、口径11.8cmを測る。器壁の厚さにムラがあり稚拙なつくり、焼成も悪く、触ると指に土の粉がべったりつく。2は口縁部で約1/5が残り、口径12.2cmを測る。3は土師器の瓶で、胴部・取手付近である。4は須恵器で高坏の坏部か、口縁部の1/6弱が残り、口径12.4cmを測る。側面はわずかに外反し、坏底との境を突帯状につくり出す。5は滑石製白玉である。直径4mm、厚さ2mm。

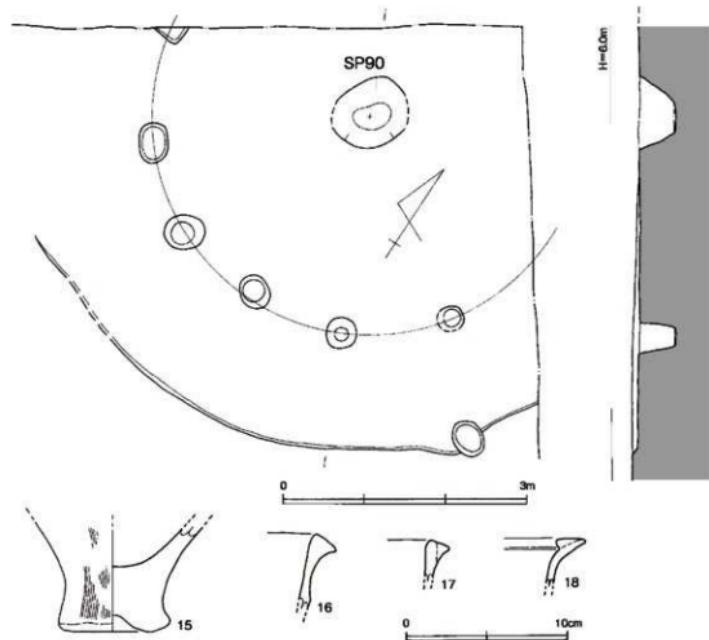
S C 0 9 (第5図)

不整形の竪穴住居跡であろうか。調査区南隅で遺構の一部を検出した。深さ25cmを測る。埋土は黒褐色粘土。2つの遺構が切り合っていると推測して掘り始めたが、土色は同じで床面も同じ深さで揃った。よってひとつの遺構と判断した。壁面は垂直に立ち床面が平らであること、大きな遺構であることから、土坑というよりは住居であろう。弥生土器がコンテナ1/4箱分出土した。

第5図6・7は壺の口縁部小片である。8・9は壺の底部である。8は上げ底で、底部直上で一旦すばまる。9は平底。10・11は壺の底部である。

S C 1 6 (第6図)

円形竪穴住居跡である。半径41mを測り、床面までの深さは10~15cm程度残っていた。中央にピットSP90がある。直径0.8~1.0m、深さ40cmを測る。焼けた痕跡がないので炉とは断定しがたい。中心



第6図 SC16(1/60)および出土遺物実測図(1/3)

から 2.7m の位置に、1.2 ~ 1.4 m の間隔で小さめの柱穴が円形に配置される。調査区内で 6 基確認できる。弥生土器が少量出土した。

第6図 15 は壺の底部である。底径 6.8 cm を測り、底部は厚く底面中央がくぼむ。16 ~ 17 は壺の口縁部小片である。口唇部が外側に肥厚し、17 は突帯を貼り付けているようだ。18 は壺の口縁部小片。

SC18 (第5図)

隅丸方形の豎穴住居跡であろう。深さ 10 cm を測る。調査区内で長辺が 4.9m、短辺 1.9m 分を検出した。弥生土器がコンテナ 1/2 箱分出土した。

第5図 12 は壺の口縁部である。口縁部は緩やかなく字状に屈曲し、口唇部に刻目を施す。胴部上位にも刻目を巡らし、刻目より下は器壁がやや薄くなる。13 は壺の底部である。14 はアマゾナイト（天河石）製の丸玉である。灰白色を呈し、直径 9 mm、厚さ 5 mm。比重が 2.565 で、蛍光 X 線分析の結果、カリウム、ルビジウムが特徴的に検出されたことから、アマゾナイトと判明した。

2) 貯蔵穴

SU01 (第7図)

調査区西壁沿いに位置し、平面プランの半分強を検出した。遺構検出面で直径 2.0m の円形～楕円形、底よりやや上の最もえぐれた部分で直径 2.8m を測る。底までの深さは 140 cm である。GL-120 cm まで人力で掘削したあと、それより下は重機で断ち割って確認した。土層図に示すように、中央に近代以降の擾乱が深く入っていた。本来は三角フラスコ状の断面を呈していたが、半ばくらいまで黒色粘土（3・5 層）が埋まつた後に肩の地山ローム（2 層）が崩落している。弥生前期後半の土器がコンテナ 2 箱分出土した。

第8図 19 は壺である。復元口径 20.6 cm、胴部最大径 21.2 cm、残高 19.7 cm を測る。遺存状態が悪く、いくつかの破片を図上で接合した。如意形口縁で胴部は最大頸部が高い位置にあり砲弾形を呈する。外面調整は継刷毛、内面はていねいにナデる。口縁部は粘土紐の継目で大きく剥離している。20 は壺の口縁部小片である。復元口径 24.0 cm。如意形口縁で頸部のすぐ下に沈線を 1 本めぐらす。21 は小型の壺である。復元口径 13.8 cm。外面は刷毛目調整で指頭圧痕が顕著、内面は刷毛目のちナデ。22 は壺である。復元底径 5.6cm、胴部最大径 15.8 cm を測る。遺存状態は悪く、上半と下半の破片を図上で接合した。肩に無軸羽状文をへら書きし、外面は小石で横方向にナデしている。23 は壺の肩部小片である。如意形口縁で肩に小さな突帯を貼り付けている。24・25 は壺の底部である。26 は大型壺の口縁部小片である。口縁端部の内側に 2.5 cm 幅で粘土紐を貼り付け肥厚させている。

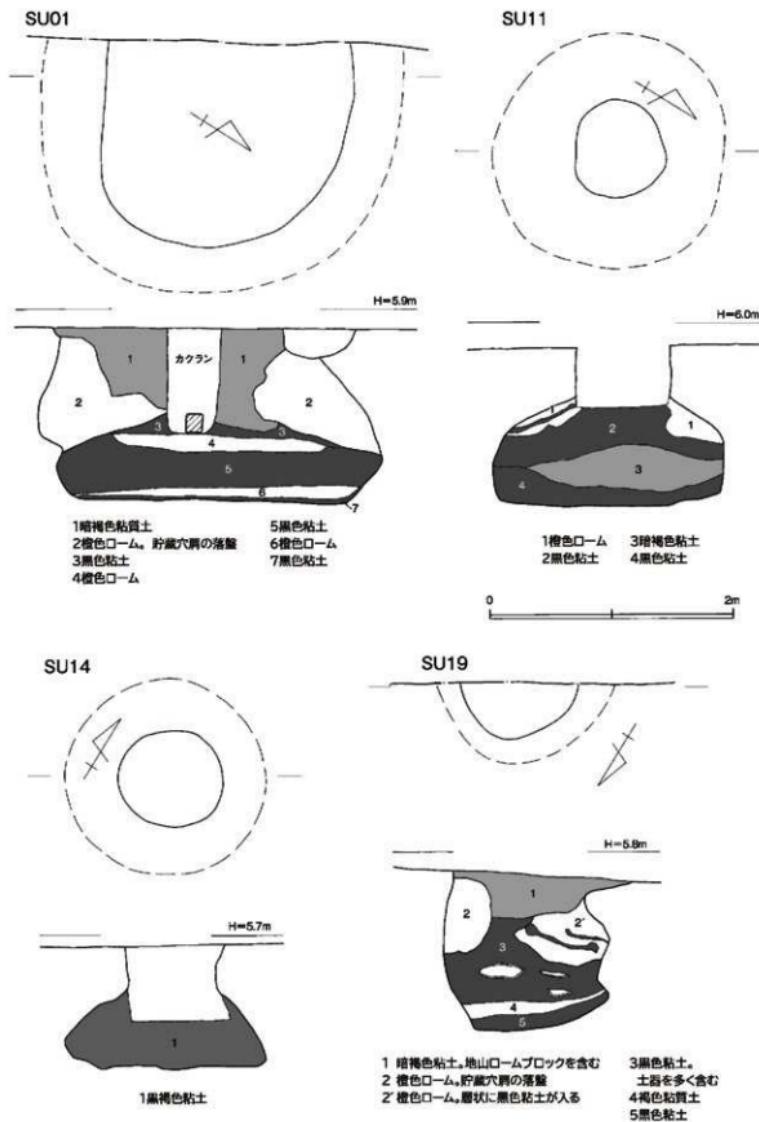
SU11 (第7図)

遺構検出面で直径 75 ~ 80 cm の略円形を呈し、底部付近では直径 190 cm を測る。立面は 40 cm ほどの深さまで壁が垂直に落ちた後、外側に大きくオーバーハングし、三角フラスコ形を呈する。底までの深さは 135 cm を測る。崩落の危険があるため重機による断ち割りを行った。暗褐色粘土を間に挟んで黒色粘土が主に堆積している。弥生前期の土器が少量だけ出土した。

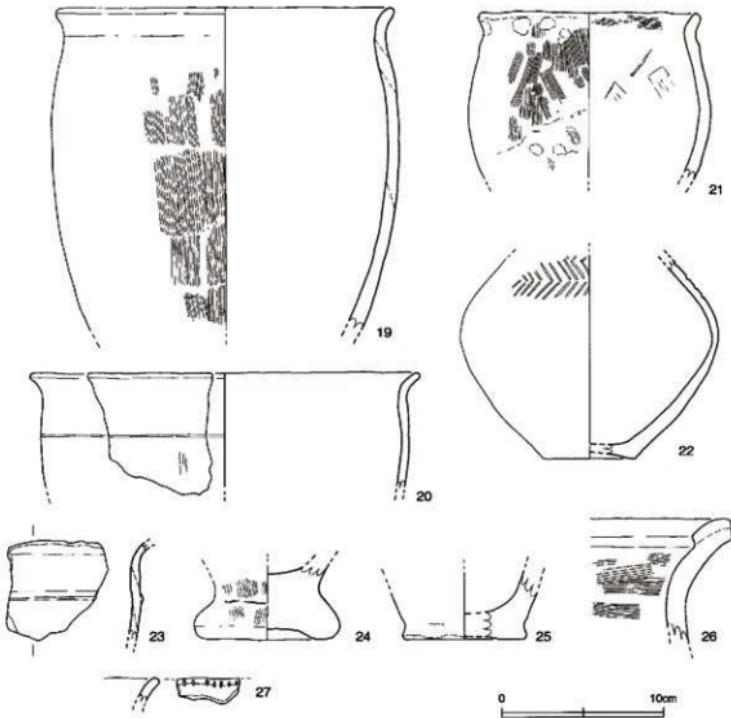
第8図 27 は壺の口縁部小片である。口唇部に刻目を施す。

SU14 (第7図)

遺構検出面で直径 80 cm の円形を呈し、底部では直径 165 cm を測る。立面は 30 cm の深さまで壁が垂直に落ちた後、外側に大きくオーバーハングする。底までの深さは 100 cm。重機による断ち割りを行った。埋土は一貫して黒褐色粘質土である。時期を置かず一度に埋まつたものか。弥生土器の壺頸部付近の破片が 1 点だけ出土した。



第7図 SU01・11・14・19実測図(1/40)

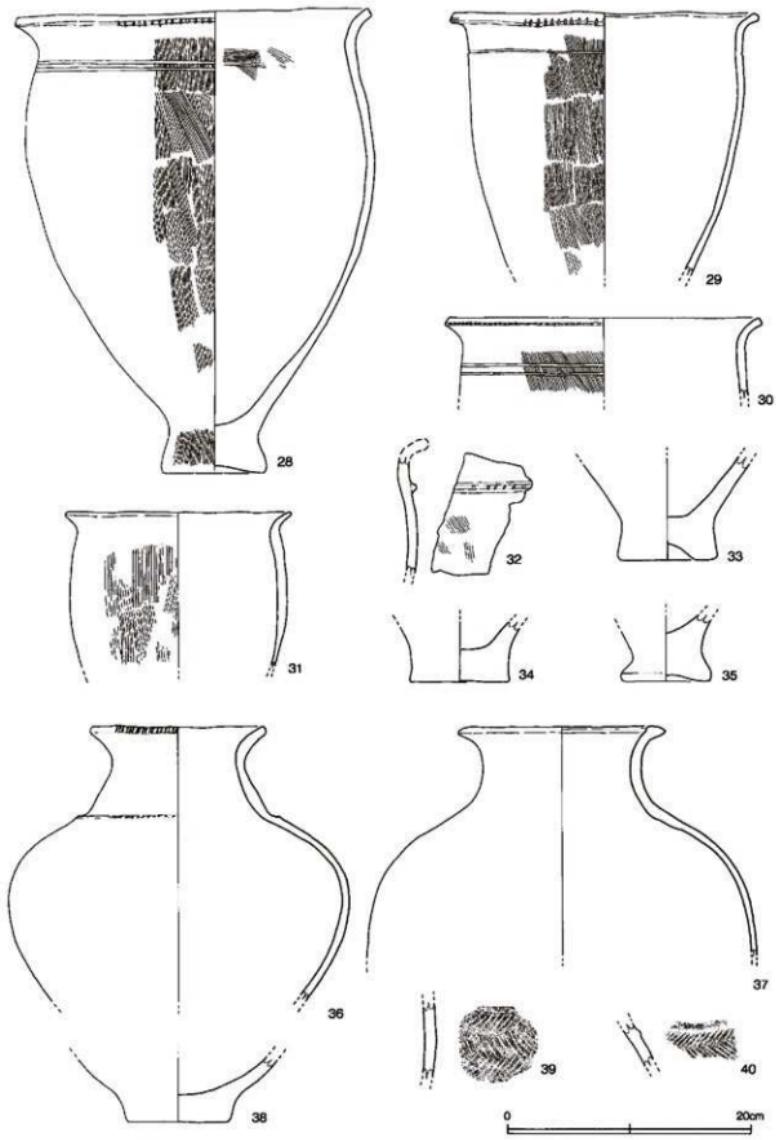


第8図 SU01-11出土遺物実測図(1/3) 19~26:SU01, 27:SU11

S U 1 9 (第7図)

調査区東南隅に位置し、平面プランの半分を検出した。遺構検出面で直径 80 cm の円形を呈し、壁面はいびつに渋曲しながらほぼ同じ径で底に至る。底までの深さは 130 cm。重機による断ち割りを行った。土層図に示すように黒色粘土が主に堆積するが、上部は両側からロームのブロックが入り込んでおり、落盤を思わせる。もともとは開口部の径が狭く三角フラスコ状にオーバーハングする形状だったのかかもしれない。3 層を中心に多くの弥生土器が出土し、コンテナ 4 箱におよぶ。土器の出土量がほかの貯蔵穴に比べて格段に多く、埋没過程において異なる扱い方をされたのかかもしれない。

第9図 28~35 は壺である。28 は口径 29.4 cm、胴部最大径 28.6 cm、底径 8.6 cm、器高 37.3 cm を測る。如意形口縁の端部に刻目を施し、頸部のすぐ下に 2 条の沈線をめぐらす。底部は分厚い。外面は全体に継刷毛を施し、内面は口縁部付近に横刷毛を確認できるがそれ以下は磨滅している。29 は口径 25.4 cm、残高 21.5 cm を測る。如意形口縁の端部に刻目を施し、外面は継刷毛で調整し、頸部のすぐ下に 1 条の沈線をめぐらす。30 も如意形口縁の端部に刻目を施し、頸部のすぐ下に 2 条の沈線を



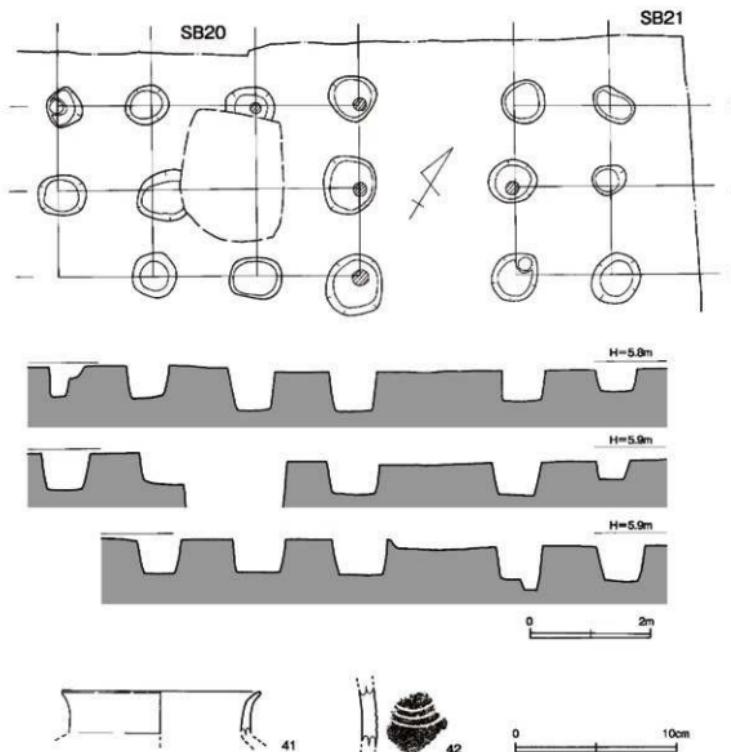
第9図 SU19出土遺物実測図(1/4)

めぐらす。口径 26cm を測る。31 は如意形口縁で外面は綿刷毛、内面は指ナデ。32 は壺口縁部付近の破片で、頸部直下に刻目突帯をもつ。33～35 は壺の底部である。分厚くて上げ底と平底がある。36～40 は壺である。36 は口径 14.4 cm、胴部最大径 28.0 cm、残高 22.5 cm を測る。口唇部に刻目を施し、頸部と肩部の境は明瞭な稜をなし、そこにも刻目を施している。37 は口径 17.0 cm、胴部最大径 32.0 cm、残高 18.8 cm を測る。口縁部内面に稜を有する。頸部と肩部の境は不明瞭である。38 は底部で底径 8.6 cm を測る。39・40 は壺肩部の破片で無軸羽状文をへら書きしている。

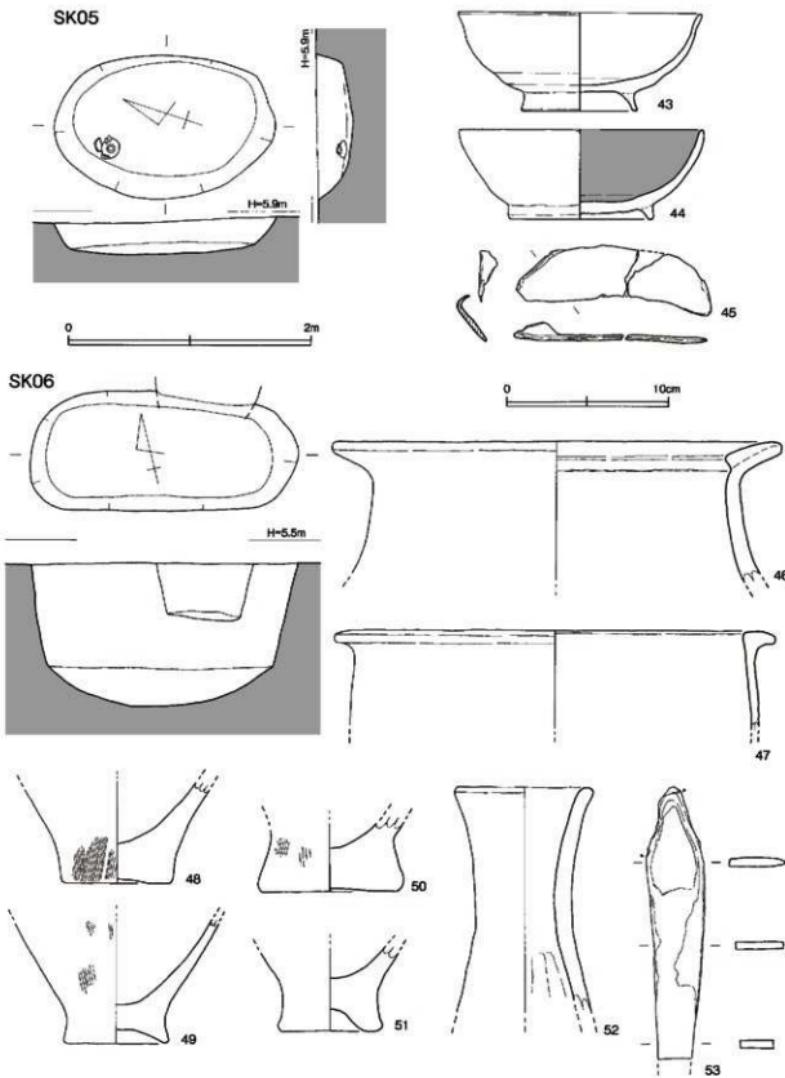
3) 捩立柱建物

SB20・21 (第10図)

調査区北半で古墳時代後期の柱穴群を検出した。これらの柱穴は大型で、大きいもので直径 100 cm、深さは 50～70 cm ある。柱穴の中央に直径 20～30 cm の柱痕跡が土色の違いで確認できるものも多い。



第10図 SB20・21(1/80)および出土遺物実測図(1/3)



第11図 SK05・06(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

柱穴は南北 3 本 × 東西 6 本が並び、さらに調査区の北側と東側にも続いているものと推測できる。柱の芯芯間の距離は、南北が 1.4m、東西は 1.5 ~ 1.7m が基本で 1 か所だけ 2.6m 離れている。柱穴からは古墳時代後期の土器が少量だけ出土した。

建物の復元案として、柱間の距離が 1 か所だけ 2.6m と広いことに意味があると考え、梁間が東西に 3 間、桁行が南北に 3 間以上の縦柱建物（倉庫であろう）が 2 棟並んでいる姿を想定した。西側の建物を SB20、東側の建物を SB21 とする。

第 10 図 41 は土師器の直口壺である。口径 12.2 cm を測る。42 は弥生土器の壺脇部片で、3 重の弧文をへら書きする。混入品。

4) 土坑

SK05 (第 11 図)

長軸 1.8m、短軸 1.2m の梢円形を呈し、深さは 25 cm 残る。埋土は褐色粘質土である。土師器の高台付き椀や内黒土器椀などコンテナ 1/2 箱分が出土した。本調査区では唯一の古代の遺構である。

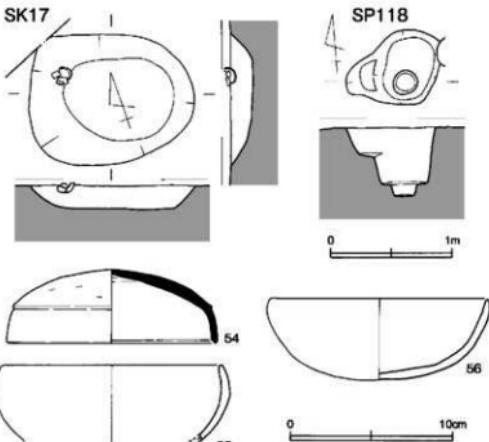
第 11 図 43 は土師器の高台付き椀である。口径 15.0 cm、器高 60 cm、底径 7.2 cm を測る。灰白色を呈し、口縁部付近には横ナデを施す。44 は内黒土器の椀である。ほぼ完存し、口径 15.0 cm、器高 5.5 cm、底径 8.9 cm を測る。外面は橙色、内面は黒褐色を呈する。器壁が厚く重い。内外面ともに磨滅。

45 は鉄鎌である。長さ 12.1 cm、幅約 3.2 cm、厚さ 3 ~ 4 mm を測る。

SK06 (第 11 図)

長軸 2.2m、短軸 1.0m、深さ 115 cm の細長くて深い土坑である。埋土は黒褐色粘土である。下層を中心に弥生土器コンテナ 1 箱分が出土した。

第 11 図 46 は壺の口縁部である。復元口径 27.6 cm。外側に湾曲させた口縁部の内面端部に幅 3 cm くらいの粘土紐を貼り付けて肥厚させている。47 は壺の口縁部である。復元口径 27.0 cm。48 ~ 51 は壺の底部である。底径は 42 ~ 7.7 cm で、上げ底のものと平底のものがある。52 は器台である。口径 8.6 cm、残高 13.8 cm を測る。53 は石製品で剣の未製品であろうか。残長 16.6 cm、幅 3.9 cm、厚さ 5.0 ~ 5.5 cm を測る。材質は板状に剥離しやすい頁岩で、基部と先端の刃部があるよう見える。基部の断面は長方形で側面は滑らかに整っている。もともとの生きた面なのか、それともここで 2 次的に割れたのか判断がつかない。両側は対称ではない。先端の近い部分は刃のように尖らせる加工を施している。灰色 ~ 緑灰色を呈する。



第 12 図 SK17・SP118(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

SK17（第12図）

長軸 1.3m、短軸 1.1m の楕円形を呈し、深さは 20 cm 残る。埋土は褐色粘質土である。古墳時代後期の土師器・須恵器がコンテナ 1/4 箱分が出土した。

第12図 54 は須恵器の壺蓋である。口径 12.8 cm、器高 4.5 cm を測り、灰色を呈する。55 は土師器の丸底壺である。復元口径 13.4 cm を測る。

5) 柱穴・ピット

柱穴・ピットを多数検出した。出土土器を観察した結果、直径 70 cm 以上の大きな柱穴は古墳時代、直径 50 cm 以下の小さな柱穴・ピットは弥生時代という傾向がみられた。古墳時代の柱穴に関して、前述のように掘立柱建物 SB20・21 の 2 棟を復元した。弥生時代の小ピットに関して、SC16 の他にも円形竪穴住居がありそうである。

SP118（第12図）

直径約 60 cm、深さ 55 cm を測る。古墳時代後期の土師器が出土した。

第12図 56 は土師器の丸底壺である。口径 13.6 cm、器高 5.0 cm を測る。

第4章まとめ

今回の比恵遺跡群第 152 次調査では、弥生時代の竪穴住居跡 4 棟・貯蔵穴 4 基・土坑 3 基、古墳時代後期の竪穴住居跡 2 棟・掘立柱建物 1 ~ 2 棟・土坑 1 基、古代の土坑 1 基のほか、ピット多数を検出した。

東側隣接地における第 30・37 次調査において弥生時代の貯蔵穴 29 基が密集して検出されているが、本調査区においても弥生時代前期の貯蔵穴 4 基を確認した。また、同時期の円形竪穴住居も 1 棟検出した。既往の調査の成果では、第 30・37 次地点に貯蔵穴、それより 30m ほど東の第 90・110 次地点に竪穴住居が集中するという土地の使い分けが示されていたが、本地点では住居と貯蔵穴の両方が混在していた。

また、比恵遺跡群の北台地においては、これまで古墳時代の遺構の分布は顕著ではなかったが、大きな柱穴をもつ總柱建物の倉庫 2 棟が並ぶ姿を復元した。古代の土坑も 1 基だけ検出した。

特筆するべき遺物として、竪穴住居跡 SC18 からアマゾナイト（天河石）製の丸玉が出土している。遺構の時期は弥生時代前期後半と思われる。九州地方で出土する縄文時代から古墳時代の緑色の玉類について、大坪志子、比佐陽一郎氏らが自然科学分析を行い、かつては肉眼観察をもとにヒスイ製とされていたものの中に、クロム白雲母やアマゾナイトといった別の鉱物のものが多く含まれていることが明らかになっている（大坪 2015「縄文文化の研究－九州ブランドから縄文文化の多様性を探る－」雄山閣、比佐 2018「福岡市内出土石製玉類の用材について」「福岡市埋蔵文化財センター年報」37 号）。アマゾナイトの玉類は韓国の青銅器時代にも多く見られ、韓国内に産地があると考えられている（庄田慎也 2006「朝鮮半島の玉文化」「季刊考古学」94 号）。今回見つかった丸玉は、肉眼観察では灰色っぽい色調であり、アマゾナイト独特の緑色とはかなり印象がちがったが、蛍光 X 線分析の結果、アマゾナイトと判明した。なお、著者がその後調査した田村 28 次調査でもアマゾナイト製小玉が出土している。



写真1 1区全景(東から)



写真2 2区全景(北東から)



写真3 SU01断面(東から)



写真4 SU11断面(北東から)



写真5 SU14断面(南東から)



写真6 SU19断面(北から)



写真7 SC16床面検出状況(南西から)



写真8 SK06(東から)



28



29



36



37



53



14

写真9 出土遺物 28~37:SU19, 53:SK06, 14:SC18

報告書抄録							
ふりがな	ひえ						
書名	比恵89						
副書名	第152次調査報告						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第1430集						
編著者名	上角智希						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1						
発行年月日	2021年3月25日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
ひえ いせき ぐん 比恵遺跡群 第152次調査	ふくおかし はかたく 福岡市博多区 はかたえきのみなみ 博多駅南4丁目220	40132	0127	33°34'55"	130°25'41" ~ 20180827 20181011	116	記録保存調査
	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
	集落跡	弥生時代・古墳時代	貯蔵穴・堅穴住居・ 土坑	弥生土器・土師器・ 須恵器	天河石(アマゾナイト)製 丸玉		
要約	弥生時代の堅穴住居跡4棟・貯蔵穴4基・土坑3基、古墳時代後期の堅穴住居跡2棟・振立柱建物1~2棟・土坑1基、古代の土坑1基のほか、ビット多數を検出した。						

